

3. コンピュータシステムの導入

(1) 枚方市立図書館のコンピュータ導入

枚方市では、図書館におけるコンピュータ導入については、図書館内外から慎重論があったため、府下の自治体の中でもかなり遅れてのコンピュータ導入となった。

昭和 57(1982)年の当初予算でコンピュータ導入研修関係予算が計上され、図書館における電算化についての調査のため、コンピュータシステム導入自治体への視察や職員派遣研修を行いながら検討を重ねた。当時は、市役所内に導入され始めたコンピュータに強い危機感を抱いた市民によって「コンピュータによる住民管理に対する枚方市民の会」が結成された時期でもあり、図書館の導入計画に対しても交渉が行われた。

しかしながら、図書館業務へのコンピュータ導入は、他市の多くの新設館ですでに実施されており、枚方市立図書館においても無視できない情勢であった。さらに、増大し多様化していく市民の資料要求に迅速かつ確実に応えていくためには、コンピュータ導入は避けて通れないとの認識のもと、市民および職員の理解と合意を得るために館内での研修や他館の見学を重ね、市民との話し合いを行ってよりよい方法を研究していこうとした。しかし、2年後に開館が予定されていた蹉跎図書館からの導入は実現しなかった。

その後、国会図書館蔵書や出版書誌情報を検索するJ/BISC・N/BISC(目録情報をパソコンで検索できるCD-ROM)とパソコン1台を導入し、職員が事務所内で使用を開始した。

平成6(1994)年4月に三代目館長として東京都五日市町(現あきる野市)から平井理館長を迎え、コンピュータについて本格的に検討を開始した。6月には各館各係から1名ずつ総勢13名で構成されたコンピュータ検討委員会が発足し、全館にオンラインシステムを導入するための手順や機器構成、システムの基本的な考え方の検討、パッケージソフト

の比較検討などを行った。

ようやく、平成9(1997)年1月の菅原図書館新館移転オープン時に枚方市初の図書館コンピュータシステムを導入することができた。大阪府下の市立図書館では最後の導入開始となった。

続いて平成10(1998)年9月には当時本館的機能を果たしていた枚方図書館にサーバを移設し、平成11(1999)年2月には、市内で2館目の導入となった。新聞雑誌コーナーを別室で運営しつつ、菅原図書館で導入したMARC(機械可読目録)から別のMARCへの置換作業を併行しながら約10万冊の遡及入力を行った。枚方図書館への導入によって貸出が増加しただけでなく、市民サービスへの効果も高かったことから、全分館への導入を加速させた。

平成11(1999)年度には香里ヶ丘(自動車文庫を含む)、楠葉図書館にコンピュータを導入することで、平成12(2000)年度当初には4館をオンラインで結んだ。自動車文庫はセキュリティ対応から、無線でサーバにつなぐことはせず、ステーションではノートパソコンを使ってオフラインによる貸出返却を行い、持ち帰ったデータをサーバに落とし込む方法をとった。

平成12(2000)年1月より試行していた集中選書を本格実施するため、平成12(2000)年4月枚方図書館に全館の発注・選書・書誌を管理する「選書担当」を設け、平成13(2001)年度からは「現地装備」方式を採用することで購入図書納期を約2週間短縮し、集中選書体制を確立した。その後平成14(2002)年3月の山田図書館における導入によって9図書館がオンラインで結ばれ、資料の有効活用や予約提供日数の短縮化など、大きな効果があった。平成15(2003)年1月からは、蔵書検索をインターネット上でも可能にし、平成16(2004)年11月からはこれまで、「かな」による検索のみであった機能を漢字で検索すること等も可能にした。

分室については平成17(2005)年度に村野分室と

枚方公園分室に導入したものの、残りの7分室のコンピュータ導入は進んでいなかった。コンピュータを導入していない分室は紙の貸出券を使用した逆ブラウンチケット方式を続け、予約も分室担当部署が一括してコンピュータに入力を行うなど、枚方市立図書館として2系列の業務形態を並行して実施する状態が続いた。分室の利用者からもコンピュータの導入を求める声が日常的に出されていた。

平成21(2009)年4月に残り7分室に導入できたことで、全館・全分室がオンラインで結ばれることとなった。初めて菅原図書館にコンピュータを導入してから12年をかけて市内全館全分室がオンライン化されたことにより、全館の資料が図書館ホームページや利用者用端末で検索可能となり、利用者の利便性が高まった。

さらに平成21(2009)年10月から、利用者がパソコンや携帯電話から図書館資料を予約できるインターネット予約サービスを開始し、利用者自身が図書を予約し、用意できた本など予約の内容の確認や取り消し、自分自身の貸出状況の確認や貸出期間の延長ができるようになった。

平成23(2011)年9月には、図書館システムのサーバと中央図書館の端末の入れ替えを行い、それに合わせて市民から要望の高かった予約システムの改良として「セット予約方式」「インターネット予約時のカート方式」を採用し、平成24(2012)年4月には、インターネットで予約の順位の確認や対象外だった自動車文庫の蔵書の予約を可能にした。

平成28(2016)年10月には、市立図書館コンピュータシステムのリプレースが予定されている中で、市内小中学校64校の学校図書館蔵書をデータベース化・オンライン化することにより市立図書館と学校図書館の連携強化を図るとともに、市立図書館の豊富で幅広い分野の蔵書を学校の授業等で活用することで、読書好きの子どもを増やし、児童生徒の学力向上につなげていく取組みを進めている。

(2) ホームページの開設

枚方市では、平成9(1997)年に「枚方市ホームペ

ージ」を開設し、インターネットを用いた情報提供を開始した。図書館のホームページは、教育委員会の施設案内が最初であった。その後、枚方市立図書館のホームページを、「見やすく・使いやすく、子どもも楽しめ、そして、枚方らしさもさりげなく表示されていること」として作成した。

ホームページに記載する内容としては、

- ・図書館からのお知らせ
- ・施設案内
- ・図書館カレンダーと自動車文庫巡回スケジュール
- ・蔵書検索
- ・子ども向けのしらべものやイベントお知らせのためのページ
- ・調べもので使えるリンク集
- ・図書館条例、統計

を挙げ、ページの背景は暖色系を用いて明るくするとともに、くらわんか舟のイラストを配して枚方らしさを表現した。視覚等に障害のある人も利用できるよう音声読み上げ機能を、また、英語・中国語等での案内も設け、図書館システム会社の協力も得ながら、平成14(2002)年3月ホームページを開設した。ただし、蔵書検索については、ホームページ開設より少し遅れ、平成15(2003)年2月から開始となった。

平成17(2005)年11月には市のホームページについて、誰もが見やすく利用しやすいデザインを実現するためホームページ運用ルール「枚方市ホームページについてのガイドライン」が作成され、図書館のホームページについてもこのガイドラインに沿って変更・修正していった。暖色系の背景が寒色系に変わり、くらわんか舟のイラスト等が削除されたが、図書館から発信したい事項(お知らせ、Q&A等)がより多く盛り込まれるようになった。市のホームページのトップページにある「蔵書検索」のボタンが図書館ページへの入口である。

(3) インターネット蔵書検索

資料の提供機能の強化充実のために、インターネットで蔵書検索ができるようになったのは平成

15(2003)年1月からである。図書館システムが導入され、各図書館蔵書の登録が完了し、図書館のホームページを平成14(2002)年3月に立ち上げた後のことである。この時点ではサーバの制約もあって、カナ検索しかできなかった。既に大阪府下図書館の蔵書を横断的に検索するシステムは大阪府立図書館によって提供されていたが、漢字での検索ができなかったため試行としての参加だった。

その後平成16(2004)年11月にWEB用(蔵書検索用)のサーバを更新、漢字検索が可能なシステムにバージョンアップした。これによって漢字検索のほか分類検索、よく読まれている本、予約の多い本、所蔵している図書館毎の検索などの多様な検索ができるとともに大阪府横断検索にも参加できるようになった。ただ、当時は分室にはシステムが導入されておらず、すべての蔵書が検索できるようになったのは平成21(2009)年4月からである。

平成26(2014)年度の図書館統計によると、インターネット蔵書検索ページの閲覧件数は約1618万件。1週間で検索が多いのは土日で、平日より20%ほど多い。時間帯では深夜早朝はやや少ないもののどの時間帯も利用されており、大いに活用されているのがわかる。近隣市では検索スピードや精度を改善したシステムを導入している例もあり、本市でも利用者の利便を図るため常に改善してゆくことが必要である。

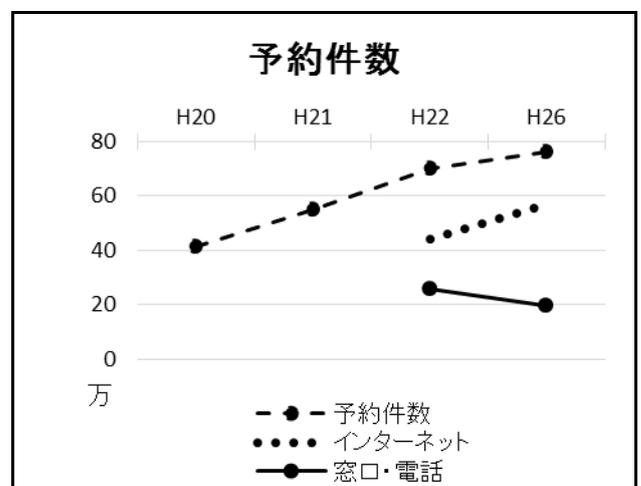
(4) インターネット予約

図書検索の次には、インターネットからの直接予約が課題となった。インターネット予約は利用者の利便と予約事務の効率化という長所があり導入すべきものであったが、導入した図書館では予約が何倍にもなったとの例もあり、業務全般がパンクする可能性もあった。そのため、導入についてコンピュータ委員会で慎重に検討した。

検討を開始したのは平成18(2006)年9月からで、予約数の上限やその数に棚置(取り置き)を含むかどうか、利用年齢、登録の方法や案内のマニュアル、周知の方法等について、平成20(2008)年4月サービ

ス開始予定で検討していった。当初は、近隣市にも例があった貸出中の資料だけを予約対象とする案もあった。しかし、利用者の利便性を考慮する観点から、対象はオンライン化されていない分室の資料、自動車文庫の資料、禁帯出資料、視覚障害者用資料を除く全資料となった。上限点数は合計12点(棚置き数を含む、12点中ビデオ・DVD・CDは計6点まで)、借りている資料で予約のないものは1回だけ延長ができる、60日以上延滞があれば予約できない、予約の用意の連絡はメールのみ、予約資料の取り置きは1週間としてスタート、利用年齢は13歳(中学1年生)以上として平成21(2009)年10月から開始した。

導入前の平成20(2008)年度予約件数411,573件、導入後の平成21(2009)年度549,115件、平成22(2010)年度698,482件と順調に伸びた。平成26(2014)年度予約件数は761,113件で導入前の1.85倍となっている。予約の内訳は平成22(2010)年度、窓口と電話を合わせて255,857件で31.2%、館内端末11,514件で1.81%、インターネット(パソコンとスマートフォン)373,984件で58.4%、スマートフォン以外の携帯電話57,127件で8.5%である。平成26(2014)年度はそれぞれ195,083件25.6%、11,505件1.51%、514,858件67.6%、39,667件5.2%となっており、窓口と電話での予約が大きく減っている。インターネットからの予約は大きく伸びているのがわかる。(グラフ参照)



予約のシステム操作については、導入後にも改修をした。当初は、蔵書検索後一件毎に ID パスワードを入れるシステムであった。これは、蔵書検索にはセキュリティをかけず予約する時に個人を認証するシステムであったためであるが、複数タイトルを予約する利用者には手間がかかると不評であった。また、上巻下巻に分かれている資料について、インターネット予約以前は下巻が先に用意できても上巻が揃ってから連絡するといった配慮をしていたものが、下巻を確保すると自動的にメールで連絡が行ってしまうため、これも手直しが必要であった。これらの改修を平成 23(2011)年 10 月から適用、カートによる予約のストックや連続予約が可能となり、先進的な上下の自動セット予約が可能となった。また予約の順位をインターネットで個々に知りたいという要望に応じて、予約順位表示を平成 24(2012)年 4 月に対応した。

(5) 集中見計い・集中選書

枚方市立図書館では、昭和 57(1982)年より各館で二つの取次会社のいずれかの取次から図書を購入し、それぞれ見計い(見本図書)が配本され、見計いの成人・児童の選書会議も各館ごとに行われていた。図書館全体の蔵書構成を構築していくために必要であった各館の蔵書の把握が、図書データのオンライン化によって可能になった。そこで計画されたのが、集中見計いと集中選書による物流および書誌データの一元化、効率化と適切な蔵書構成の構築であった。取次から配本される見計いは、購入する額の図書費によってパターン配本化されている。予算が多いと配本される図書が多く、予算が少ないと配本される図書が少ないため、集中して 1カ所の取次との取引額を多くするほうが、多くの見計い図書が配本される。その多くの見計いの中から現物を見て図書を選ぶことは、より確実な選書に繋がり、厚みのある蔵書構成や幅の広い蔵書にするための有効な方法であった。

平成 12(2000)年枚方図書館内に選書担当を立ち上げ集中選書を開始。また図書装備のスピードアッ

プを図るために、枚方図書館で現地装備(平成 13(2001)年 4 月より)も行った。

その当時の様子は『図書館年報 2000』平成 11(1999)年度に詳しいので引用する。

「2001 年 4 月からの本格実施に向けて、2000 年 1 月より枚方・香里ヶ丘・楠葉の 3 館で集中選書及び発注の試行を開始し、2000 年 4 月より全館(分室を除く)での試行を実施していくことになった。それに伴い 2000 年 4 月より、枚方図書館奉仕担当の中に集中選書を担当する職員 3 名が配属された。それまで、各館で実施していた見計い選書・発注・受入事務(図書検収)は一部を除いてすべて枚方図書館で集中されることになった。これまでは、各館で個別に見計い(見本図書)の送品を受けて選書していたが、それを枚方図書館一箇所で見計いの送品を受けて、従来通り現物選定を基本に、全館の職員が一緒に選定する方法に変更した」「成人図書については、各館でリストによる一次選書を行い、全館で現物選定による、最終選書を行う 2 段階選書の実施を開始する。毎日選書担当が作成した選書リストをもとに、各館で必要な図書を選定し、毎週水曜日に枚方図書館で行う全館の選書会議で、見計い図書を前に現物選定を実施する。全館の選書会議には、各館から担当者が 1 名参加する。見計い図書は、必ずしも全館分の冊数が配本されているわけではないので、各館で必要な部数を確保できない場合もある。そのため、会議ごとに各館に優先取得順位をつけ、できるだけ平等に必要な図書を確保できるようにしている。児童書については、選書担当で毎日、仕分けをして児童書の見計いを各館に配送している。各館ではその見計いを選書し、割り当てられた図書の『見計い表』を作成し、毎週木曜日の全館選書会議に参加する。選書会議では、その『見計い表』をもとに 1 点ずつ、各館での購非を決定していく」

このようにして全館選書を行い、枚方市立図書館全館として必要な図書を漏らすことなく購入し、効率的かつ効果的な選書を行える方式にしていった。



毎週実施している児童選書会議

また、「図書の現地装備の検討を2000年度より開始し、2001年2月には、実施している堺市立図書館と八尾市立図書館への視察を行い、4月より枚方図書館事務室にて現地装備を実施した。これにより以前に比べて概ね2週間納期を短縮することができた」と記載されている。

課題として「各図書館にできるだけ速く図書を納入し、標準化された正確な図書情報を提供していくことを目的に選書担当では、業務の改善を行っている。

- ①選書方法の改善
- ②図書データの置き換え作業
- ③雑誌の集中受入の検討
- ④書店購入図書・寄贈図書の受入一本化の検討
- ⑤発注方法の改善の検討を行っていく」との記載があり、これらの問題点の改善に続けて取り組んでいくことになる。

平成17年(2005)年4月のオープンを前に、中央図書館6階に市内全館の資料収集を統括する選書担当が設けられた。①～⑤の問題点で①の改善として成人選書において各館でリストにより選書したデータをメールで選書担当に送り、選書担当で会議までに見計い棚より抜き出しておくことにより、選書会議の内容を薄めずに時間を短縮し、効率化した。これには「購入方法プログラム」(図書館職員作成)により可能となった。②の図書データ置き換え作業は、「マーク置換」という操作を1冊ずつ行うことで完了した。③雑誌の集中受入と④書店購入図書・寄贈図書については、選書担当で一括してデータを入力し各館に配布する一元化と効率化を図った。⑤発注方法の改善については、市民にリクエストされ

た図書を確実に短時間で提供できる方法をと知恵を絞った。大手書店への発注と取次会社へのネット発注、および地域の書店発注の3ルートによる発注方法の導入である。3つの発注ルートを使い分けることで、より早くさまざまな収書が可能となった。

(6) 図書整理の変遷

コンピュータ導入に伴い、蔵書管理は、それまでの原簿と2枚の目録カード(書名目録、分類目録)による管理に代えて、コンピュータに取り込んで利用する目録「MARC(マーク): MACHINE READABLE CATALOGING=機械可読目録)」によって行うことになった。コンピュータシステムの導入とマークの使用によって検索機能は飛躍的に向上した。

導入1館目の菅原図書館では図書館資料の大部分を占める図書資料について固定長(内容量に関わらず一定の情報しか記載されない)のマークを採用したが、再度「MARC検討委員会」で討議を行い、2館目の枚方図書館以降では、マーク情報の精度を高めるため可変長(情報量に応じたデータ)のマークを採用することになった。

以来、マークは同じマークを使用しており、内容細目の購入、バージョンアップもその都度行っている。これらのマークの内容についての相談やメンテナンスなど書誌データについてのあらゆる業務は先述の選書担当が一元的に行っている。

資料の整理方法はコンピュータ導入で大きく変わった。貸出方法が逆ブラウンケット式でなくなったため、ブックポケット、ブックカードが不要になり、資料のフォルムがすっきりし、幅を取らなくなった。後になって貸出手続きの際、返却日が印字されたレシートを渡すようになったため「本をかえす日」の用紙(デートスリップ)の貼付、返却日の押印も廃止した。これによって、利用者のカウンターでの待ち時間を短縮した。

昭和57(1982)年5月の楠葉図書館の開館以来、一般書の分類表示においては、日本の現代小説は「F」として1段ラベル、エッセイは「E」として2段ラベルを使用、それ以外の分類では4桁まで分類して

2 段ラベルを採用していた。中央図書館開館時には様々な検討の結果、枚方図書館を引き継ぐ形で開館する中央図書館の資料については、規模が大きくなり所蔵冊数が増えることを勘案して新しい分類指示表を作成した。大きな変更点としては

- ・主題については6桁分類し、3段ラベルを使用する。
- ・主題の図書についても著者の姓2文字を指示し、背ラベル3段目に表示する。
- ・伝記では被伝者の姓2文字を指示し、背ラベル3段目に表示する。

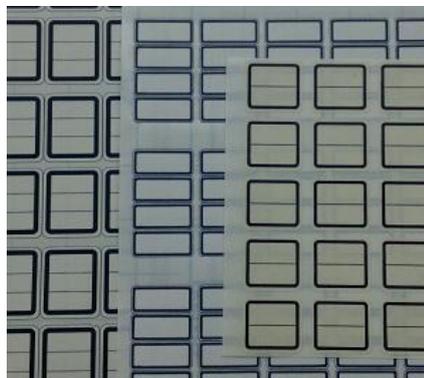
が挙げられる。

現在も中央図書館は6桁分類3段ラベル、それ以外の分館・分室では4桁分類2段ラベルを使用している。

児童の分類表示では、「えほん」「ちしきえほん」「やさしいものがたり」「F (にほんのものがたり)」「N (がいこくのもの)」「みんわ」「すいり」「SF」と主題の3桁分類を採用しているが(中央図書館は「すいり」「SF」を廃止)、現在も一般書以上に館によって違いがみられる。大きな違いは「えほん」について画家の姓2文字を指示しているかどうか、「むかしばなしえほん」を採用しているかどうかであり、それによって配架方法も異なっている。

「ちしきえほん」や主題の図書の分類展開桁数、洋書の整理方法にも若干の差異が生じている。

各分館分室ごとの利用に限定されていた時代を経て、インターネットの普及により、市内の蔵書の流通量が増えた。また、複数の市内図書館施設を利用される方も多くなった。全館で統一した資料の分類表示をしていく必要を検討している。



一般書用ラベル



児童書用ラベル